『アグロエコロジー』訳者から

私のアグロエコロジー

23年11月発行の話題の書『アグロエコロジー』。書名を聞いて、とりあえずは多くの人が「アグロエコロジーってなに?」という疑問にぶつかるだろう。

だが、その問いの答えを人に求めてはいけない。この書と格闘し、頭から湯気を出しながらも自分なりの答えを紡ぎ出せたとき、一つ世界が目の前に大きく広がる。希望がわいてくる。――そんな本である。一人ひとりに「私にとってのアグロエコロジー」があるはずなのだ。

翻訳にかかわった方々は、総勢20人。「どうしてもこの本を訳して、日本の読者に届けたい」と熱い思いで、各方面の大学の先生たちが力を合わせたという。今回、その訳者の先生方に「私にとってのアグロエコロジー」を語ってもらった。一部抜粋し、掲載させていただく。読者のみなさん一人ひとりのアグロエコロジーを考えるヒントになることを願って。

「緑の革命は科学技術の進歩による食料増産の成功例である」という言葉に何の疑問も持たずに学生生活を送りました。1993年に日本で初めて開かれた有機農業の国際会議でアジア各国の代表から「緑の革命はアジアの農村に大きな弊害をもたらした」という事実を突きつけられ、大きなショックを受けました。これを機に、国際的な有機農業運動に積極的に関わることになった私が、再び大きなショックを受けたのは、それから十数年後、カリフォルニアの農業が不法就労者等の低賃金労働者によって支えられている、それは有機農業であっても同じであることを知ったときでした。

食料問題は生産だけでなく、流通・分配やそれを取り巻く政治の影響を大きく受けることを知りました。そして、有機農業運動がめざしているのは、ただ単に禁止資材を使用しない「ノンケミカル」農法ではなく、社会正義や公正な取り引き、次世代への配慮や予防原則なども含んでいると考える中で、出会ったのがアグロエコロジーでした。持続可能なフードシステムの実現のためには、慣行農業か有機農業かの議論ではなく、栽培方法の転換から始めて、社会システムの転換まで段階的に進めることが必要であり、アグロエコロジーは、そのための指針であると考えています。

澤登早苗（恵泉女学園大学人間社会学部教授）

世界的に読まれている
「アグロエコロジーの教科書」
待望の日本語訳！

アグロエコロジー

持続可能なフードシステムの生態学

著者　スティーヴン・グリースマン
監訳　村本穣司・日鷹一雅・宮浦理恵
訳　　アグロエコロジー翻訳グループ
B5判　農文協刊　5940円（税込）

21世紀にあるべき農業の姿として、世界銀行や国連、EUなどが、2000年代初頭から、小規模・家族農業によるアグロエコロジーを推奨している。不耕起栽培・混植・カバークロップ・緑肥など、伝統的な農業の知恵や技術を生態学の視点から再評価し広げていく実践であり、持続可能な農業と流通消費システムを目指す社会運動でもある。現在、規模の経済・集約化・専門化・画一化された工業的農業や経済優先社会が地球を壊しつつあるなか、アグロエコロジーは、世界を根本的に変革するための科学的実践的アプローチとして注目されている。
アグロエコロジーの第一人者・カリフォルニア大学のスティーヴン・グリースマンによる原著は、欧米を中心に学際的な教科書として広く使われており、このたび初の邦訳が完成した。

著者　スティーヴン・グリースマン。カリフォルニア大学サンタクルーズ校アグロエコロジープログラムの創設者（初代校長）。現在も活動を続けながら、ワイン用ブドウとオリーブの有機栽培にも取り組む。

アグロエコロジーを直訳すると農生態学。このため、生態系に配慮した農業→有機農業という意味に捉えられそうですが、アグロエコロジーにはもっと広い意味が込められています。工業化された農業に対抗するオルタナティブとして、持続可能な農業をめざす環境運動・社会運動のなかで発展してきた概念です。

浅岡みどり（立教大学大学院博士課程）

作物学、気象学、土壌学、遺伝学、社会学……。アグロエコロジーは、細分化された農学を包括的に紡ぎなおし、新たな食糧生産のあり方を照らしだします。

とりわけ、生態学をバックボーンとして農生産をとらえ直すことで、化学的・機械的な力に頼った農業を卒業し、自然環境の潜在力をうまく活用する道筋が見えてきます。栽培植物にあてていたフォーカスを農生態系に広げ、その機能や役割を理解すると、様々な現代農業が抱える課題の解決策が明らかになりそうです。

田中淳子（植物家）

アグロエコロジーとは、直訳すると「農生態学」。本書の内容の大部分は基礎的な生態学（生物と生物、あるいは生物と環境の関係を研究する学問）の原理と知識であり、一見、非常に静的に見える。だが、じつはそれは、持続可能な農業と社会への大変革の志を秘めた熱い解説であることが、読めば伝わってくる。そして第五部以降では本書の主張が全面展開され、迫力を増す。読み応え十分の全512ページ。索引付き。

メキシコ・タバスコ州での伝統的なトウモロコシ・マメ・カボチャの間作の例。害虫忌避・雑草抑制・生育促進の効果があるとされているが、日本にもこのような例はたくさんある。本書を読むと、日本の農業はもともとアグロエコロジー的要素にあふれていることに改めて気づく

『アグロエコロジー』目次

第一部　アグロエコロジー序論
第１章　農業の抜本的変革という課題
第２章　農生態系の概念

第二部　植物および環境の非生物的要因
第３章　植物
第４章　光
第５章　温度
第６章　湿度と降雨
第７章　風
第８章　土壌
第９章　土壌中の水
第10章　火

第三部　より完全な個生態学的視点
第11章　生物的要因
第12章　環境複合態
第13章　従属栄養生物

第四部　系レベルでの相互作用
第14章　農生態系における個体群生態学
第15章　生態系における遺伝資源
第16章　作物群集における種の相互作用
第17章　農生態系の多様性
第18章　攪乱、遷移と農生態系管理
第19章　農生態系のなかの動物
第20章　農生態系のエネルギー論
第21章　景観の多様性

第五部　持続可能性への移行
第22章　生態学に基づく管理への転換
第23章　持続可能性の指標

第六部　持続可能なグローバル・フードシステムの実現
第24章　農業・社会・アグロエコロジー
第25章　フードシステムの再構築における文化と地域社会
第26章　持続可能な農生態系から持続可能なフードシステムへ

アグロエコロジーは生態学を含む「科学」の限界と不完全さを認識し、農家や先住民の経験や日々の観察に基づく知識など科学以外の方法によって作り出された知識をも尊重する「超学際的」アプローチを採用する。科学は原理・原則を教えるが、それだけで農業生産はできない。一方、農家の知識には思い込みがあるかもしれないし、他の場所で再現できないこともあるかもしれない。科学的知識と農家の経験に基づく圃場固有の知識が一体となって、持続可能な農業生産が可能となる。

そのためには研究者と農家の対等な交流が不可欠で、その実現のためにアグロエコロジーでは「参加型」研究をも重視する。農家が研究の企画から評価に至るすべての過程に無理のない範囲で関わる方法である。この手法は特に有機農業や自然農法を研究する際に重要である。これらの農法は、農家が長年の試行錯誤により開発した農法で、研究者が開発した農法ではないからである。特に、病虫害の出にくい農生態系を作り出し、経営的にも安定した有機・自然農法の農家は、研究材料の宝庫である。私にとって、アグロエコロジーはそうした研究を進める理論的枠組みとしても重要である。

村本穣司（カリフォルニア大学サンタクルーズ校有機農業スペシャリスト）

本書に、以下のような内容があった。「緑の革命により子実生産が増加する品種が広がった。しかし、ある地域の農民は、もとの（子実生産割合が小さい）品種を栽培するようになった。この農民たちは植物残渣を住宅資材や堆肥原料にした」――子実生産のみを求めなかった農村は資本主義的な経済発達度が低いかもしれないが、これが示唆することは大きい。

もう一つ、食料を供給する農村は「人間社会と農耕技術の結合地」であり、食料生産を維持することは、農村社会を持続させることである。本書から考えていただきたい視点と思う。

荒木肇（元新潟食料農業大学食料産業学部教授）

今まで、有機農業を議論する中で常に慣行農業との対立があった。しかし、有機農業の市場の拡大が進む中で、有機農業のスケールアップの議論が重要となっています。ここでは、単に有機農業と慣行農業を対立的に捉えるのではなく、これらのアプローチが連携し、有機的な遷移を可能にする道筋を見つけるべきです。アグロエコロジーでは、生態学的な原則に基づく有機農業が重視されますが、過渡期において代替型の農業が有益な役割を果たすこともあります。持続可能な農業への転換は、単なる対立ではなく、遷移的なプロセスであるべきです。その点で、アグロエコロジーは、地域においてよりよい農業を見出し、作りあげる強力なツールになるでしょう。

小松﨑将一（茨城大学農学部附属国際フィールド農学センター教授）

アグロエコロジー、それは未来の食と農を映し出す鏡だ。農業・農村や食料に関する諸課題の解決策が持続可能な視点から照射されている。

松平尚也（耕し歌ふぁーむ）

私にとってのアグロエコロジー、それは、漁業や林業も含みます。なぜならば食の生産は景観全体の影響を受けながら多様な形で実践されるからです。

小林舞（京都大学経済学研究科特定助教）

本書をひもとけば、すぐに、あなたの食と農が具体的に変わるわけでないかもしれない。しかし、各自の視点で読み込んでいけば徐々に持続可能な食と農の在り方、そして、その道筋が身近に発見できるきっかけになるはずだ。

日鷹一雅（愛媛大学農学研究科准教授）

勤務校の留学制度により2008年から1年間、カリフォルニア大学サンタクルーズ校でスティーヴン・グリースマン教授の下で学ぶ機会を得た。彼のアグロエコロジーや民族植物学の授業に出席し、授業の仕方、学生たちを持続可能なフードシステムに触れさせるような仕組みを興味深く体験した。

なかに、受講者が持ち回りで料理をし、授業のはじめに共にそれをいただくという時間があった。明るいカリフォルニアの太陽の下、おしゃべりしながら食事をするという極めて愉快な授業である。それは、生物と環境とのかかわりあいの科学である生態学を基盤とした「農の生態学＝アグロエコロジー」の目指すもっともシンプルなこと、すなわち「食と農における心地よく楽しい関係性」を若い学生たちに体感させる目的があったのかと思う。作物を育てること、調理すること、そして仲間と楽しく食べること、そんな単純なことがアグロエコロジーの先にある持続可能なフードシステムの一つの在り方なのだろうと、振り返って思う。

宮浦理恵（東京農業大学国際食料情報学部教授）